

飛耳長目

通巻180号 平成30年11月1日発行

「開頭」63号から 読書と私 読書論

森 信三

一 読書について書くことは私にとって実に楽しいことである。というのは読書そのものが私にとって無上の楽しみだからであろう。ときどき人から「あなたのご趣味は何ですか」と尋ねられることがあるが、そうした場合私の返事は必ず「サア読書ぐらいなものですかナア」というのであって、これ以外の答えをした事はまずない。人によると、作歌を以て私の趣味の一つと考えている人もあるらしいが、私の作歌は間欠的であって、常に思想の激変期にいわばその先駆的兆候として現れるのであって、普通の歌人のように年中中絶することなく作歌を続けるというわけでは決してない。そこに私が、ひとり作歌人でないばかりか、素人の歌作りのうちでも一種変態的存在である所以がある。

がそれだけに私の読書に対する趣味の根ざしは深く、それは最早単なる趣味という程度を超えて、私の生活におけるもっとも本質的な部分をなしているというべきであろう。時々思うことであるが、晩年に子供達への教育の義務も一応果たして、その上子供達の力によって、一家の生活が支えられるようにもなつて、私は純粹に自分の好きな書物だけを讀んでいられるような身分にでもなれたらとしたら、それこそ実日にこの世の極楽といつてよいであろう。ただ今日のような時代には、容易にそうした極楽境は考えられそうもないが、たとえ晩年の二、三年だけでも良いものだと時々勝手な夢想にふけるのである。

二 このように、読書は私にとって全生活中心もつとも本質的な部分を占めるものであり、したがっていざ読書について語るとなると、一体何から話してよいやら、我ながら戸惑うほどであるが、第一に記したい事は、私ほど勝手な読書をする者は少ないではないかということである。もつともこれには「学問の片端をかじっている者のうちでは」という条件付きの話ではあるが…… それにしても私が近頃しみじみと感じる事は、私という人間は一般的な意味で学者と呼ばれるに値する人々の仲間入りをする資格のない人間だということである。もつともこれは必ずしも今に始まったことではなく、かなり若い頃からではあるが、しかし最近では我が身にうち響く諸々の現世的な波動によって、改めてこの感を深くしつつある次第である。

ではどういふ点でそうした感慨を抱くかというに、それは一口で言えば、私の読書は、我が生命の第一義的欲求に基づくものであり、従つていわゆる専門に関わらないばかりか、自分の講義の種目などというものにさえ、一切拘束されないといいることがある。私は現在大学の講座および人員の関係上、教育と語学を担当しているものであり、従つて世間的に言えば、あるいは読書は前記の二学科を中心とすべきかもしれないが、現実はおおよそそれらとはかけ離れているのである。何となれば現在の私にとっての最大関心事は、実に「人間」と「世界」とであつて、この巨いなる人類永遠の二つの謎を、いかにして一元的に解くことができるかということに、私の生命を賭けた中心課題があると言つてよい。なお読書におけるこの根本的な二大焦点は、現在はもちろん将来といえども容易に変わるまいと思う。いやおそらく死に至るまで、本的に根は変わらないであろう。

ネットで 森信三先生と修身教授録 と検索

にもかかわらず私の現実的関心の焦点は、誌友諸氏もつとにご存知のように、教育、特に国民の義務教育におかれていたのであって、これは私にとって単なる関心の域を越えて、まさに血につながる宿命的なものといふべきであろう。小誌が純粋の個人雑誌でありながら、誌友の98%前後までがすべて教育者である所以も正にそこにあると思われる。私の国民教育に対するこのような宿命的な関心は、主として私自身の生い立ちならびに閱歴から来るものである。代用教員から師範の一部へ入学し、人生のスタートを「小学校教師」として切った私の脚が常に国民教育の大地から離れ得ないのは当然である。講演などの際、小学生の鉛筆の持ち方、削り方などというような、小さな現実上の諸問題に関して、私が異常なる情熱と興奮とを示すのに意外な感を持たれて、そうした異常な情熱が、一体どこから発するのかという疑問にされる人も少なくないようであるが、そうした異常な情熱の発する真の根源は、私の内的生活の基盤が常に国民の義務教育に置かれており、したがって私の心眼の世界には、常に小学生の生徒や、彼らの為に日夜心身を勞していただける小中学の先生方が生きているからである。

学者にあらず
宗教家にあらず
はたまた教育者にもあらず

ただ宿縁に導かれて
国民教育者の友として
この世の生を終わる

四

これほどまでに国民教育に対して宿命的な関心を持ちながら、私の読書のうちにはいわゆる教育書というものは絶無に近いといつてよい。では一見矛盾と言う他ないこの現象は、そもそも何を意味するのであろうか。思うに私の読書の中心は、我が生命の根本課題として、常に「人間」と「世界」の本質的探求に集中せられつつあるのであるが、同時にこのことは、それによつて得られた叡智が、常に現実の最大関心事たる教育そのものに向かつて、集中されつつあることを意味するのである。すなわち端的に言つて私には、教育を書物によつて知ろうというような間接的な態度に留まり得ないものが厳として内に存在しているのである。

最初の考えではこのような身の上話めいたことを書くつもりは毛頭無かつたのであるが、筆というものは妙なもので、いつの間にか書く者自身の意図を無視して、変な茶の木島へ人を引張って行く。が、こうしたことになつたというのも、平素大体の事は分かつてもらつてつもりであるが、私の読書の根本態度と、それを裏付けている私の生命の根本志向については、いちどはつきりとした了解を願つておきたいとの希望が私の脳裏を去らないからである。

五

しかし変わった前置きはこの辺で打ち切つて、以下私の読書法の具体的な細部に触れてみたいと思う。そこで真つ先に始めねばならぬのは私の読書は、
「その時私の生活圏内にある書物の中で、自分が一番心を惹かれる書物を読む」

というのが根本信条であつて、このことに關する限り、これまではほとんど踏み外した事はないと言つてよい。

このことは端的直截に言えば、「自分がその手に入る範囲内で、いちばん読みたいものを一冊取つて、それに全精魂をぶち込んで読む」……と言つて一言に尽きる。このことはさらにこれを裏返して言えば、いわゆる「義務的な読書は一切しない」ということである。私のような無名の田舎の老書生には新刊書の「書評」の依頼などいちども受けた事はないが、しかし私などのような人間には、ああした受け身的な読書はやり切れない苦痛だと思ふ。自分の読みたい書物でも読めないでいるのに、それほど嗜慾をそそられてもいない他人の書物を義務的に読まされるなどということ、私のような人間には最大の苦痛である。それも大体の調子がわかつたら、サッサと途中で切り上げて、しかるべく一文を書いて義理をすますというならばとにかく、(いわゆる書評と称せられるものの大部分は、この種のものらしいが)もし正直に全集を讀了した上で書くとなつたら、実に耐え難い苦痛ではないかと思ふ。

では私のこのようながままな読書は何に基因するかというに、結局読書における徹底的な主体性を確保したいからである。實際読書ほどに、読む者の自主的主体的の確立を要するものは少ないと思ふ。私が読書にあつて、一時に一冊主義を唱え、本は全集で買つたら読めないと言ひ、さらに一時に二冊以上の書物を求めぬこと、および買ったらすぐにその場から読み出して家に着くまでに、少なくとも二、三十ページは切り込むことなどと激しいことを言うのも、ひとえに読書における自主的主体性の確立を希求するが故に他ならない。書架に読まない書物がたくさん並んでいるということは、一種の圧迫感を与え、不愉快なものである。時

にその豊富さ？愉快を感じることがないというのがないとは言えぬが、しかしその場合は「鑑賞の立場にたつての感じであつて、真摯に書物と取っ組む者としての態度ではないと言わねばならぬ。

以前にも一度記したことであるが、一時に二、三冊と書物を買つたら、二冊目三冊目の書物に向かう時の立ち風ではどうしても鈍らざるを得ず、二冊目、特に三冊目はずいぶん読まずに終わる場合さえ少なくないと言つてよからう。

同時にこのように一時に一冊しか読めないというこの根本原則を厳守すれば、収入の少ない人でも「金がないから本が読めぬ」と言う嘆きはまずまずないと言つてよからう。何となれば一人の人間が一ヶ月に読みうる書物の冊数は平均してみると予想外に少ないものであつて、普通に教師生活をしている人々の場合を考えてみるに、大体月に三、四冊平均に読めたら良い方ではないかと思う。月に三冊として10日に一冊は読み上げねばならず、もし月に四冊となつたら週に一冊という勘定になる。学校教師として一日5、6時間の授業のほか事務的な仕事も少なくないのであるから、週一冊平均の読書をするという事は、かなりの努力を要することであつて、普通の人ではまず月3冊というあたりで充分ではないかと思う。

それだけにいかなる書物を読むかと言ふことが重大問題となるわけで、もしこの選択を誤つたこれほどまでに努力した読書も結局くたびれ儲けと言う結果になる恐れがある。それ故この書物の選択ということについては改めて述べることにしたいと思う。(「開頭」61号昭和27年8月号)

読書の時間と場所

新三上論

一 森信三

読書法のうち最も重大な問題の一つは読書の時と場所との問題である。すなわち書物は一体いつどこで読むのが良いかという問題であつて、この点を突き止めないことには真の力強い読書には出発の仕様がなないのである。

ところでこの読書の時と場所とも問題は結局時間と空間の問題であるために、それぞれ切り離すことができない。すなわち何時と何処でとはどうしても一つになる外ないのであるが、しかも現実としてはこれを時間の側から規定するよりも、空間の側面から規定する方がよりハッキリするようである。そしてそこには時間の主観性に対して空間の客観性ということだが、その主なる原因をなしているためであらう。

したがって古人もこの読書の時と場所との交差点は、これを場所の側から捉えており、かつかの有名な「三上説」となっていることは人々の知るところである。三上とは廁上(しじょう)、鞍上(あんじょう)、枕上(ちんじょう)であつて、この三つが昔の読書家にとつて最も工夫のしどころと考えられたわけである。換言すれば一見なんでもなく過ごされるこの三つの場所を閉却しているようでは、真の読書家とは言えぬというわけである。そこで以下これを手がかりとしながら現場における読書の時と場所の問題について少しく考えてみたいと思う。

最初の廁上であるが、これ昔も今もその条件は対して変わらぬといつてよからう。私も30代にいちどこれを試みたことがある。小さな本立てに主として古典を入れておいて、手当たり次第に開いたところを読んだものである。古典を選んだのは時間に制限があるため、出きるだけ内容の充実圧縮されたものがよく、小説などのように安易な興味にひかされていつまでも立ち去りがたいなどということないためには、古典な

いしはそれに順ずるような凝縮された内容のものが良いと思う。

私の廁上の読書は二、三年も続いたかと思うが、それを廃した主たる動機は、外ではなくて、書物特に古典的な書物を、あつた場所に置くことに對する、何かしら冒険に似た気持ちに対するであつた。ことに気になつたのは来客に對する気兼ねであつて、廁上の読書を廃止した主要な動機はここにあつたと思う。もつとも松本義懿(よしい)君の如きは、比較的善意に解されて、時々それをもつて私が読書家たるの一微標として人にも話され、私としてなんとも言えぬ面はゆい感のしたことも一、二度あつた。

では現在の私は廁上の読書に對してどう考えているかというに、ただ今のところはしてないけれども、これは必ずしも悪くはないと思つている。だからそのうち心の落ち着くとも、ぼつぼつ再開しようかと考えている。ところが私が廁上読書を再開しようと思ひ出した一つの大きな原因は、今度の住居では便所の前のところが一段高くなつていて、ちよつと床の間のよくな感じがする。それ故そこへ書物を置いて、書物への冒瀆感がよほど薄らぐと思ふのである。もしこつとした段のない普通の便所であつたら、何か小さな台でも備えて、その上に書物を置くのが良いと思う。

次に廁上の書物の選択であるが、これについてはすでに述べたとおり、短く引き締まつた表現で、短時間に収穫のある語録風のものが良いと思う。現在の私の考えでは、フランスのモラトリスト系の思想家のものがよくはないかと思う。一例をあげればラロシユフコウの「箴言集」のような……。

二

次に鞍上は現代にあつては電車汽車等の乗り物がこれに該当し、これを無視して現代の読書

は成立しないとまで極限し得るほどである。私などもずつと若い頃から、この乗り物での読書を重視してきたが、この傾向はむしろ歳をとるとともに顕著になってくる傾きがある。それは人間は歳と共に次第に俗縁が多くなるために、家ではもちろん勤務先でも、とかく読書に専念しにくくなる。ところが乗り物の中だけは、全く一切のそうした俗縁から遮断せられるので、読書には絶好の場所である。私自身の現在を反省してみても、おそらくこれが最上の読書の場所になっていくといつてよいほどである。もつともこれは篠山三日間の「隔絶」は別としての話であるけれども……。

車上の読書のいまひとつの長所は、あのスピードにある。あの快速のスピードから来る一種の緊張感が、そのまままた読書の緊張感となるのである。そこでまだ実行には至っていないが、大阪六甲間のパスを求めておいて、本が読みたくなったら、大阪まで二、三往復したら、さぞかしよく本が読めるだろうと考えている。これは私としては決して冗談ではない。

とここで最近フットしたことから、これに極めて接近した一つの好案を得た。これは私にとって全く秘伝物？ものであるが、この際思い切つて誌友諸氏のために公開することにしよう。それは電車のプラットホームの腰掛けの上である。車中書物を読んで、もう少し読みたいと思ふところ、下車駅になってしまった。家へ着けばそのまま続けられない。さりとて道々本を読みながら歩くわけにも行かない。もつとも京都府下の伊藤直次氏のように、毎日学校への往復途上を唯一の読書場所とするほかないという苦行者もあるにはあるが、そこで考えついたのが、プラットから外へ出ないで、一段落ち着くまで読むのである。それに味をしめてみると、気候の良い期間は、電車のプラットには都会人には一つの好適な読場所になることを発見した

のである。これは一步を進めると必ずしも自分の乗降駅とのみに限る必要なく、随時随所に見晴らしが良くて比較的乗降客の少ない駅を見いだせば、けだし現代における格好の読書場の一つである。

三

一日一時間以上の読書は絶対的である。

この根本原則を逸脱したらどんな偉い人でも停頓は免れまい。けだし現実界では「進まぬという事は退歩を意味する」からである。そこで学校勤務の大部分の誌友の身になって、最上の読書の場所とは考えてみるに、けつきよく授業後生徒の帰った後での教室であろう。あの生徒の空機の並んだ姿は、一種「聖なるもの」が感じられる。教室の片隅でこれを眺めながら、日没時までの読書に没入する快味を知らぬ人は真の教育者ではあるまい。たとえ校長や教頭になつても、読書はどこかの空き教室を選ぶ方が能力が上がる。ことに教頭の場合は校長のように独立した部屋がないのだから、雑然たる書類堆積の自分の事務机の上で、書物が読めるなどと考えるのはむしろ滑稽と言つてよからう。とにかく結論としては、

どこをどうしても毎日家へ帰るまでに、少なくとも一時間の読書は絶対的であり、而して問題はそれを「どこで」読むか、その場所を突き止めることが肝要である。そのためには最後は学校にも、私費のスタンドを一台用意するまでの必要があるであろう。そうして職員会などでの必要な遅くなつても、一人居残つて所定の読書だけは済ませねば帰らぬというだけの意思の強靱が必要である。

四

最後に床上の読書であるが、これは人間が一日八時間前後眠らねばならぬ肉体を持っている

以上、昔も今も変わらない。私も近頃身の落ち着くがままに、これを復活している。ところでこの床上の読書で問題なのは、書物の選択だと思ふ。私の考えでは床上の読書は童話や詩歌集、あるいはよく熟(な)れた宗教書などが良いかと思ふ。一言にして「心清まる書物」である。アンダーセンの童話集、暮鳥の「雲」、それに妙好人の語録など、私が「床上の書」として最も親しい書物である。これらの心清らかな人々の手になった書物を読みつつ、眠気を催してきたら、さつさとスタンドのネジをひねつて、眠りにつけば、そのまま夢はそれらの「心清らかなる人々」の世界へと誘われる。読書人としての至上の喜びはけだしこの辺にあるといつてよからう。とにかく床上の書として禁断の書は小説類であつて、現実のあくどい葛藤の虚構の筋につられて、いつまでも止められず、つい睡眠不足になるといふことでは、決して真の読書人のとるべき態度ではない。(「開頭」10月号 昭和27年10月4日発行通巻第63号)

あとがきに替えて

「開頭」が93号まで出てきたからには前号と同じく「修身教授録探求」をお休みにして、「開頭」の主要論文・記事を優先して紹介することにした。理由は多分、森信三全集に掲載のない貴重な記事かもしれないという判断からである。諸兄、編集子の独断を諒とせられたい。(30日二繁)

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話 0744-4513422
Email: hij3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushn